

## 資料

# V.E. フランクル理論における 病の中の苦悩の意味の検討 — 「意味への意志」に焦点を当てて—

牧野智恵<sup>1</sup>

## 概要

V.E. フランクルは、避けることのできない苦悩であっても、その窮境に対してとる人間の態度によって、その苦悩を人間的な業績へと変化させようと考え、その考えをもとに、ロゴセラピーを創始し絶望を勝利に転換させる方法を示している。このフランクル理論は、不治の病に罹患した患者や死を意識せざるを得ない終末期の状況でも、「意味」を見いだすという視点で有効といわれている。しかし、「意味への意志」とはどのようなものかについて詳細に解明しようとした報告はない。本稿の目的は、フランクルの基本的立場である「意味への意志」とはどのような態度であるのかについて検討することである。本稿では、「意味への意志」と「快楽の意志」「力への意志」の違い、健康・長寿への志向と「意味への意志」の関係について論じ、意味を追求することによって逆に「意味への意志」は得られないことについて論じた。つまり、不治の病の中で「意味」について意識させることでなく、患者が「今、ここで」の自分以外の大切なことがらへの没頭に向けて関わりを持つことが、結果として「意味」に向けた看護であることが示唆された。

キーワード V.E. フランクル, 不治の病, 苦悩, 意味への意志

## 1. はじめに

古今東西を問わず、病気を嫌なこととするのは人情の自然である。そのため、ひとたび治癒困難な疾患に罹患したとき、人間はその病をなかなか受け入れることができず、「なぜ私がこんな病気にならなければいけないのか」「もう治らないならば、生きる意味がない」といった懷疑や絶望に陥る。このように、ひとが苦しみに耐えることの意味を信じられず苦悩を抱いたとき、我々医療従事者は彼らにどのような支援ができるのだろうか。また、その病気が治らないと診断された時点から、病人に残された人生にはどのような意味があるのであろうか。このような人生への問いを抱き苦しむことは、実存的苦悩あるいはスピリチュアルペインなどと言われ、その形態についてはさまざまな研究が行われている<sup>1) 2)</sup>。そして、治癒困難な疾患に罹患することは、時には人間に、より深いレベルの問いかけをし、意味探求をさせるといわれている<sup>3)</sup>。実存的苦悩の実態に関する研究は、特に進行がん患者や終末期患者の苦悩の実態<sup>4) 5)</sup>、苦悩の測定スケールの開発<sup>6)</sup>、といった

研究がみられる。このような中、苦悩の中の意味についての概念の検討や<sup>7)</sup>、スピリチュアルを基盤とした新しい心理療法的介入の検討<sup>8)</sup>において、必ず引用される思想家としてV.E. フランクル (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) による「意味」概念がある。

フランクルは、だれもが死を意識せざるをえなかった強制収容所での体験や、精神科医としての体験を通して、人生はいかなる条件のもとにあっても意味をもっていると認識し、「避けられない苦悩のような人生の悲観的、否定的側面であっても、その窮境に対してとる人間の態度によって、人間的な業績 (achievement) へと変化させることができる」<sup>9)</sup>と考えた。そして、患者の責任性を軸にして、人生の意味を自らが見いだせるよう働きかけようとしたセラピーがロゴセラピーである<sup>10)</sup>。このロゴセラピーでは、「意味への意志」「意志の自由」「人生の意味」を基本概念として取り上げられ、特に「意味への意志」はフランクル思想の基本となる概念とも言える。

また、このフランクルのロゴセラピーの考えをもとに看護理論を構築した理論家とし

<sup>1</sup> 石川県立看護大学

て、ニューヨークのJ.トラベルビー (Joyce Travelbee, 1927-1974)がいる。彼女は、「看護とは、対人関係のプロセス (interpersonal process) であり、それによって実践専門看護師は、病気や苦難の体験を予防したりその体験にうまく対処できるように、そして必要なきはいつでも、それらの体験のなかに意味をみつけだすように、個人や家族、あるいは地域社会を援助することである。」(傍点原文)<sup>11)</sup>とし、さらに「専門実務看護師は、個人および家族が病気や苦難に立ち向かえるよう援助するばかりでなく、これらの体験のなかに意味を見いだすよう援助することの準備がなければならない。」(傍点原文)<sup>12)</sup>と述べている。しかし、J.トラベルビーは「意味への意志」について、 فرانクルの次元的人間論に基づいた十分な検討を行うには至っていない。

では、フランクルの言う「避けられない苦悩」であっても、それを「人間的な業績」へと変化させうる「人間の態度」あるいは「意味」とはどういうものなのであろうか。このことを明らかにすることを通して、病気における苦悩の意味があきらかになり、難病やがん終末期患者への看護的介入のあり方にも示唆が得られると思われる。その解明のためには、その前提となるフランクルの次の三つの基本的立場、すなわち「意味への意志」、「人生の意味についての問いの観点変更」、「人生の価値」について説明を加える必要がある。

本稿では、「意味への意志」について解明し、不治の病や終末期患者が苦悩の中でどのような意志によって、苦悩を克服できるのかについて論じることにした。

## 2. 「力への意志」「快への意志」と「意味への意志」の違い

死をも意識する不治の病は、患者に「このような状況で生きる意味はあるのでしょうか」「もう、病気が治らないのなら生きていく意味はない」などといった「生きる意味への問い」を投げかける。この問いに対して、F.W. ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) はかつて「生きる理由があればほとんどどんな事態にも耐えられる」と言い、フランクルによれば「自分の生の意味を知る人こそ、他の何よりもこの意識のおかげで外の苦境や内の障害を克服できる」<sup>13)</sup>と述べている。このフランクルの言葉は、自らの体験(診察、医療処置、強制収容所の体験)をもとに、避けることのできない過酷な状況においても、人間

には「自分の人生を意味で満たしたい」という「意味への意志」があり、この人間にとって本来的な意志が苦境にある人間をして最後まで耐え抜くことを可能にさせるのだという確信に至った。では、この「意味への意志」とは具体的にどのようなものであろうか。

フランクルは、人間の意志を「快楽への意志」「力への意志」「意味への意志」の三つに分け、それらの意志のなかで人間にとっての本来的な意志は「意味への意志」であると考えている。そしてそれらの関係を次のように位置づけている。

精神分析にとって人間とはいわゆる快楽原理——つまり快楽への意志によって左右される存在でしたし、また個人心理学にとっても、いわゆる権勢欲つまり力への意志によって規定される存在でした。しかし、実際には、人間は意味への意志によって最も深く支配され続けています。(傍点原文)<sup>13)</sup>

ここでいう「快楽への意志」はS.フロイド派心理学でいう快楽原理であり、「力への意志」はA.アドラー派心理学でいう地位衝動を指してフランクルが用いた用語である。たとえば、われわれ人間はだれしも、快を求め不快を避けようとする衝動や、他の人より「より強くなりたい」という権勢欲を有している。この衝動ないし欲求をフランクルはそれぞれ「快楽への意志」「力への意志」と呼んだのである。しかし、人間はこの二つの意志を有しているだけでなく、「自分の人生を意味で満たしたい」という「意味への意志」によって「最も深く支配されている」と彼は言う。そして、「意味への意志」が満たされないときに、つまり「意味への意志の欲求不満」が生じたときにはじめて他の二つの意志が生じるとして、次のように述べている。

人間は結局、そしてもともと、意味への意志というか、自分の人生をできる限り意味で満たしたいとの憧憬によって魂——といわぬまでも精神を吹きこまれて、それに従って生きがいある生活内容を得ようと努め、自分の人生からこの意味を闘いとしています。われわれは、この意味への意志が充足されずにとどまる時に初めて、またその時に限って、——人間はますます多量の衝動満足によってまさにこの内面的不充足を麻痺させ、自分を酔わせようと努めるの

だと信じます。言い換えると快樂への意志は意味への意志が空しく戻ってくるときに初めて登場します。<sup>14)</sup>

つまり、「快樂への意志」「力への意志」は「意味への意志」が充足されないときに初めて生じるとフランクルは考えたのである。そして、このような「意味への意志」が満たされずにとどまるときに生じる空虚感を、彼は「無意味感」(Sinnlosigkeitsgefühl)・「実存的空虚感」(existenzielles Vakuum)・「意味への意志の欲求不満」(Frustration des Willens zum Sinn)<sup>15)</sup>などと呼んでいる。

では、このように「意味への意志」が満たされず「快樂」や「力」を求めることによって内的不充足を麻痺させるという場合、そこには、どのような構造がみられるのだろうか。そこで改めてこの三つの意志の関係を見てみることにしたい。

### 2.1 自己を中心とした「力への意志」「快樂への意志」

フランクルは「快樂」や「力」について、「快樂は人間の努力の目標であるよりも、むしろ本当は、意味充足の結果である。そして、力はそれ自体目標であるよりも、むしろ本当は、目標への手段である。」<sup>13)</sup>と述べている。このことはどういうことであろうか。彼は、本来的「快樂」とは意味充足の結果として派生的に生じるものであり、また、「力」は意味充足のための単なる手段にすぎず、この二つはいずれも、生きる「目的」ではないと考えた。そして、この目的と手段との顛倒の結果、場合によっては神経症にいたることについて、「性的ノイローゼ」を例に次のように説明している。

快樂は第一義的かつ一般的には目的ではなく、一つの結果、いくなれば課題達成にともなう副次的結果なのである。言い換えれば、快樂は人が意味を満たしたり価値を理解するやいなや自ずと確立されるのである。更に、もし人が自分の目標として快樂を獲得しようとするなら、その人は必然的に失敗する。というのは、彼は自分が何を目指していたのかを見失うからである。このことは直接に性的快樂を獲得しようとするためにかえってそれを獲得できない性的ノイローゼ患者において容易に立証することができるのである。男が自分の能力を示そうとする

か、女がかつて経験した性交時のオルガズムについて自分の能力を示そうとする度合いが大きければ大きいほど、反対に彼らはその目的を達成しにくくなるのである。<sup>17)</sup>

この引用文でいう「快樂への意志」について、フランクルの示した図を参考にして解釈してみたい(図1参照)。「快樂」は「目的」ではなく、矢印(a)のように「意味を満たしたり、価値を認識」すること、つまり「意味への意志」の充足を通して自動的に矢印(b)のように確立される、いわば「副次的結果」である。しかし、点線(c)に示すように直接「快樂」を獲得することを「目的」とした場合、自分が本来「目的としていたものを見失う」ため、必然的に「快樂」を得ることは「失敗する」のというのである。このような顛倒はやがてその人をして「性的ノイローゼ」に陥らせることになる。

では、「力」を目的とする権勢欲の場合はどうであろうか。フランクルは次のように述べている。

権勢をねらう人は成功を取り逃がす。なぜなら「相手はこちらの意図に感づいて気分を害する」からである。つまり権勢目当ての「野心家」を見抜いてしまうのである<sup>18)</sup>。

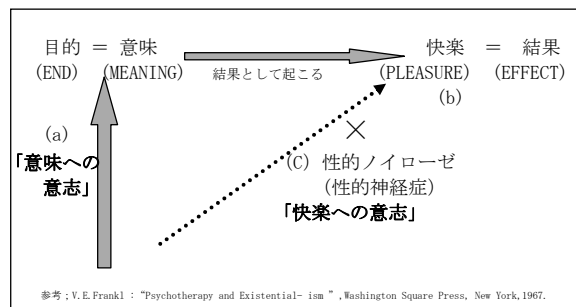


図1 「意味への意志」と「快樂への意志」の関係図

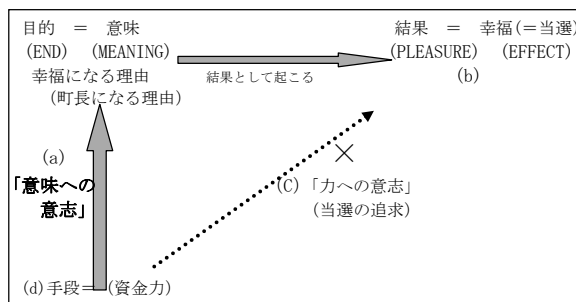


図2 「意味への意志」と「力への意志」の関係図

例えば、権力を得ることを目的として選挙に立候補したとしても、その選挙活動の中で有権者はこちらの意図に感づいて、多くの有権者はその立候補者に票を投ずることを避け、その結果選挙での当選（成功）を取り逃がすことがある。なぜなら、「権勢目当ての野心」は見抜かれてしまうからである。

この「当選する」ということを「力への意志による快楽」とあてはめて、図2をもとに説明を加えると、選挙に当選するには、ある程度の力（資金力）(d)は必要である。しかし、それだけでなく、有権者の生活や福祉の向上といった、「町長になる理由（意味）」が充たされねばならない。その理由（意味）、例えば町民の平和や発展のためにどうすべきかについて自己超越し、それに専心すること（a）によって、その結果として矢印（b）のように幸福に満ちた栄誉（当選）が得られるのである。

このように快楽や力を得るには、それらを直接目的として追求するのではなく、それらを達成しようとする理由（意味）がまず充たされなければならないということである。

もっとも、人間には快楽や力を求める欲求のあることは決して否定することができない。それらは生理的・社会的欲求として、いわば人間に自然に備わっているものである。フランクルは、このことを十分認めた上で、人間は果たしてそれだけで真の充足を得ることができるのであろうか、と問うのである。つまり、この二つの欲求ないし意志はいずれも自己が生きる（より偉大に、より快適に）ための手段の追求であって、その「生きる」というのは何のためか、という生きる目的そのものを充たすものではない。そこには、「自分は何のために生きるのか」という実存的問いと反省が欠けているため、この欲求の実現のみを追求して生きている中では、やがて実存的空虚感に陥る可能性がある。このことは現代の精神状況に端的に現れているように思われる。

近年、科学技術の進歩によって物質の豊かさや健康の増進、性の解放の促進などが実現されてきたが、それと反比例する形が心の貧しさや空しさの顕著さの中にみられるように思われる。アメリカのある大学では自殺を企てた60人の学生の85%が「人生には意味がない」と感じており、そのうちの93%が「きわめて良好な健康状態にあり、社会的にも積極的に参加し、勉学に関しても優秀な成績を修め、家族関係も良好であったというこ

とが確認された」と述べている<sup>19)</sup>。また、日本においても、現代の若者の電車の中での振舞や姿から、「<豊かさ>の代償が、心の<貧しさ>だった」との指摘もみられる<sup>20)</sup>。この事實は、人間がどれほど「快楽への意志」「力への意志」を充足させても（あるいはむしろそれらの充足にとらわれればとられるほど）、「意味への意志」の欲求不満が露わになることを示している。つまり、「生きるため」の意志は「何のために生きるか」という理由（意味）に支えられることによって、はじめて真に有意義なものになりうるということである。

精神科医であるフランクルは、人間にとって限界状況と思われる強制収容所での過酷な体験の中で、人間には「快楽への意志」や「力への意志」の他に、人間にとってより本来的な意志として、「自分の人生をできる限り意味で充たしたい」という「意味への意志」が存在することを認識し、この意志が、人間に「最悪の事態をこらえさせ、最後の努力を行わせる」<sup>14)</sup>と確信するに至ったのである。

## 2.2 健康・長寿の志向と「意味への意志」の関係

では、治癒困難な疾患に罹患した患者の場合の「意味への意志」とはいかなるものであろうか。

まず、「快楽」や「力」への意志を、「健康」への意志と置き換えて考えてみることにしたい。たとえば、われわれが「より長く、より健康に生きたい」と、健康になることを追求する場合はどうであろうか。このことを明らかにするためには、まずその前提となる「『幸福の追求』は幸福を妨げる」というフランクルの考えを検討し、次に「健康の追求」についての検討を行うことにしたい。

図3はフランクルの「意味への意志」と「幸福」の関係を示した図である<sup>21)</sup>。

彼は、「快楽」の追求が「性神経症」をもたら

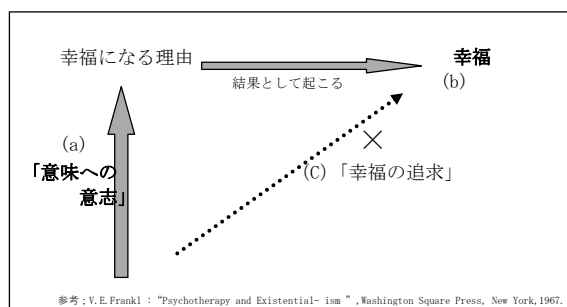


図3 「意味への意志」と「幸福の追求」の関係

しかねない「自己破壊」<sup>21)</sup> 的性質を持ったものであることを例に挙げて、そこから「『幸福の追求』は幸福を妨げる」ことを指摘している。

通常は快樂は決して人間の努力の目標ではなく、むしろ目標達成の副次的結果であるし、またそうあり続けるに違いない。目標を達成することが、幸福になるための理由を成立させるのである。換言すれば、もし幸福になる理由が存在すれば、あるがままに、自動的に自然発生的に、幸福が結果として起こる、ということである。・・・しかしさらにいえば、人は幸福を追求することができないのである。・・・まさにそうすること [幸福を追求すること] によって、人は幸福になるための理由を見失い、幸福それ自体が消えていく・・・[からである]。(傍点原文)<sup>21)</sup>

つまり、「幸福」とは、「快樂」と同じように、それ自体を追求して得られるものではなく、むしろ、「幸福になる理由」があれば、自動的に「結果として起こる」ということである。さて、この「幸福の追求」を、「健康の追求 (健康な身体状態の追求)」と置き換えて考えてみることにしたい。

一人ひとりの命はかけがえのないものであり、そう思うが故にわれわれは「より長く、より健康に」生きようと、健康の維持や疾病の予防に努めている。高血圧、糖尿病、癌、さらにはメンタル面においても、その予防は重要である。国もそのかけがえのない一人ひとりの健康を守るために、予防や健康の維持に向けさまざまな事業を行っている。このように心身共に健康であることは、健康な社会生活を送る上では必要不可欠な条件であることはいままでもない。しかし、もし、健康になることを人生の目標とした場合どうなるであろうか。例えば、不治の病に罹ってしまったときや、終末期になった場合、なかなか自分の状況を受け入れられず大きな苦悩の中で、時には自殺に至るとの報告もみられる。

図4は、図1と図3をもとに「意味への意志」と「健康の追求」の関係を示した図である。「意味への意志」と「健康」の関係を考えて場合、「健康」は人生の目標を実現するための手段 (=力) にすぎない。そうであるにもかかわらず、健康になることを人生の目標として生きた場合 (c)、この「健康の追求」は逆に健康を逃すということである。では、もしわれわれが健康になることを人

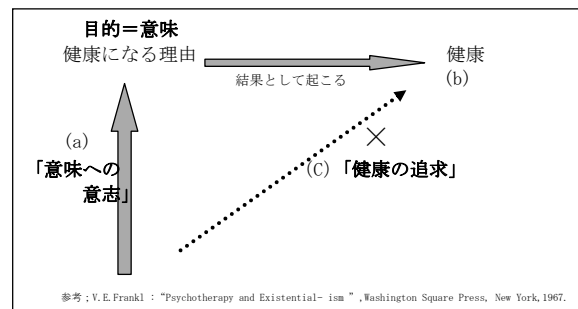


図4 「意味への意志」と「健康の追求」の関係

生の目標とした場合どうなるであろうか。

フランクルは、ある重い心臓病を患っていた典型的なヒポコンドリー (心気症) の女性を例に、心臓病の悪化を心配するためにかえって心配している内容 (心臓病の悪化) が事実となりやすい実例を示している<sup>22)</sup>。そして、さらに病気に対する心配だけでなく、健康に対する願望までもヒポコンドリーに一役を演ずると、次のように述べている。

ところで何のために人は食べ、飲みそして着るのか? もちろん健康のためである。それなら「まず正義を求める」代わりに、初めから健康を求めたらどうなるか? しかし、そうなったらもう健康どころではない、というのもその瞬間からヒポコンドリーという病気が始まるからである。例えば、自分がぐっすり眠れるかどうかをあまり気にするとかえって眠れない。なぜなら、熟睡には無頓着と弛緩が前提であるのに——睡眠心気症者は注意を張りつめて眠れるのを待ちかまえているからである。(傍点原文)<sup>18)</sup>

このヒポコンドリーという病気の発症は何を意味しているのだろうか。たとえば、自分が生きていくためには、健康で、必要な食事が摂取でき身体も動かせることが必要である。しかし、実際には健康を維持することは人生における目標ではなく、「力」への意志と同様、本来の「人生の目標」を実現のための一つの「手段」あるいは「前提条件」でしかない、と、フランクルは言うのである。そして、この健康を維持することを目的として生きることによって、「ヒポコンドリー」という病気が始まることを指摘しているのである。

また、彼は、もし本来の健康を求めるのなら、健康の背後にある「(人生の) 目的とは何かを探求すること」が大切であることを述べている。

ミュンヘン大学病院の二名の医師が、強制収容

所のかつての囚人たちを診察した結果、彼らが収容所の圧力から解放されたときに初めて内科的な心臓・肺・胃腸などの病気が発生したことを明らかにした。この報告を受けた فرانクルは、「負担を急に取り除くのも負担をかけすぎると同じように病気をおこすなら、そんなとき人間を身体的にも精神的にも支えるものは何だろうか」（傍点原文）<sup>23)</sup> と考えた。その結果、「人間は体も心も健康でありたいと思うなら、とりわけ必要なことが一つある、つまりふさわしい生活目標、しかるべき人生の使命、要するに生活の上で絶えず要求を、むしろ自分の力に叶うような要求をになうことだ」<sup>23)</sup> と結論を出した。つまり、「健康はある目的実現のための一つの手段あるいは前提条件でしかない」<sup>24)</sup> のであり、健康を望むのならば「まず最初に要求されるのは、手段の背後にある目的とは何なのかを探求すること、何のための手段なのかを探求すること」<sup>25)</sup> が大切であるということである。この「手段の背後にあるもの」がとりもなおさず「人生の意味」であり、それに向けて生きる中に「意味への意志」が見られるということである。

冒頭で述べたニーチェの「生きる理由があればほとんどどんな事態にも耐えられる」という言葉はまさにこのことを指すのであろう。すなわち、「自分の人生の意味を知る人——そういう人だけがすべての困難を最も容易に克服することもできる」(傍点原文)<sup>26)</sup> ということである。

以上、見てきたように、快樂・幸福そして健康は、それらを直接的な目標として追求することによってではなく、それらがもたらされる理由(すなわち意味)がまず充足されることによって、その結果として自ら生起するということであつた。いかえれば、「快樂」「健康」を得るためには、まず「意味への意志」の充足が必要であるということである。しかし、ここで一つの大きな問題が生じてくる。それは、「意味への意志」はいかにして充足されうるのかという問題である。というのは、「意味への意志」が意味を直接的に追求する意志であるとすれば、「快樂への意志」や「力への意志」と同じように、必然的に意味の充足は失敗に終わるはずであるからである。人がもし意味を意識的に追求するならば、いわば意味ヒポコンドリーという意味追求病に至ることになるのではないだろうか。このような意味追求は現代の生きがい論の流行の中に見られるようにも思われる。では、意味追求病に陥ることのない、真の意味充足が可

能になるにはどのようなことが必要なのであろうか。それがフランクルの言う「人生の意味についての問いの観点変更」である。

### 3. 「人生の意味についての問いの観点変更」

例えば、難治性疾患に罹患し一生その病気と共に生きなければならなくなり、まして死の淵に立たされている人が、「自分の人生には意味がない」と苦悩を抱いている場合、「意味への意志」はどのようにして充たされるのであろうか。フランクルは強制収容所で自殺企図をもちた人々を前にして次のように考えた。

「私はもはや人生から期待すべき何ものも持っていないのだ。」これに対して人は如何に答えるべきであろうか。ここで必要なのは、生命の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。そのことをわれわれは学ばねばならず、また絶望している人間に教えなければならないのである。哲学的に誇張して言えば、ここではコペルニクス的転回が問題なのであると言えよう。すなわちわれわれが人生の意味を問うのではなく、われわれ自身が問われた者として体験されるのである。人生はわれわれに毎日毎時間問いを提出し、われわれはその問いに、詮索や口先ではなくて、正しい行為によって応答しなければならないのである。人生というのは結局、人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならないのである<sup>27) 注1)</sup>。(アンダーライン：筆者)

ここでフランクルが述べていることは、難治性疾患や避けることのできない死を目の前にして、「生きるのは何のためか」「このような苦悩は何の意味もない」と、自己の「生きる意味」を問い、絶望感を抱いている人間に対して、その人がその運命的事実に対していかなる態度をとるべきかを示してくれていると思われる。それは他ならぬ「人生の意味についての問いの観点変更」ということである。

難治性疾患の中で、生命や人生の意味とは何かということの問題にしているとき、人は通常それを「自己」の方から、つまり、自己を中心にして

「われわれは人生から何を期待できるのか」と問う。この観点は、いわば自己を世界の中心にして、自己から世界をみる見方であり、このような見方は、自己の利益という視点から世界を見る見方である。

たとえば、次のような例から、「自己を中心とする見方」について考えてみたい。

難治性疾患を宣告され、まして余命数ヶ月と言われたとする。自己の死によって、これまでの地位や名誉、富までも失うと感じたとき、「大切な地位や富、ましてこの幸せな生活までも失うとわかった今、人生から何を期待できるのか。もう、生きる意味はない」と、その残された人生への無意味感のなかで絶望に陥ることは珍しくない。しかし、この人生への問いは、「自己」を世界の中心において人生をみている見方である。つまり、これまで築き上げた地位や名誉、さらには健康を失いたくないという「自己の利益」という視点から人生を見ているのである。

そのような自己中心の人生観ではこの限界状況に耐えることができないということを上記のフランクルのことばは意味している。この自己中心の人生観は、先に述べた「快樂への意志」と「力への意志」といった、単なる手段にすぎない事柄を目的とした人生観に基づく観点に他ならないのである。フランクルはこのような人生観を抱く人間像を、モナド論主義の人間像と呼んでいる。この人間像は、「ホメオスタシスの維持あるいは回復が人間にとって重要である限り、もっぱら自己自身にのみ関心を持っている<sup>28)</sup>」という人間観である。ホメオスタシス原理に基づく動機理論は人間をあたかも一つの閉じられた体系であるかのようにみなし、「内的平衡の維持または回復」・「緊張の解除」・「衝動の充足と欲求の満足」を究極の目的とするかのようにみなす。ここで言う、モナド論< monadology 単子論>とは、G. ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646 - 1716) の主要著作の一つである。この中でG. ライプニッツは「モナド」を實在の基本的因子として述べ、「単子は外部と交渉するための『窓』をもたない。したがって相互に作用しあうことなく、そのいっさいの変化は全く自発的、独立的に自己のうちから生じる」という考えである。フランクルはこのようなホメオスタシス原理に基づく動機原理を生理学的次元においてだけでなく、心理的次元における自己中心の自己実現欲求にまで拡大して考え、このようなホメオスタシス的人間像をモナド

論的人間像と名づけている。そして彼はこのような人間像を超え、「人間は自己自身を超えて意味や価値を求め、そのような仕方で世界へと方向づけられている<sup>28)</sup>」という「自己超越的」な人間像を提示している。それらは、自己の「快樂」、自己の「力」の追求として、自己のためではあるが、「その自己が何のためか」という問いに対する答えは、そこからは出てこないのである。

フランクルはそのようなとき、「人生の意味についての問いの観点変更」を行うことによって、その無意味と感じる人生を意味あるものへと転換できると述べている。

つまり、「人生から何をわれわれはまだ期待できるか」という観点から「人生が何をわれわれから期待しているか」という観点へ、われわれの人生観が変更されねばならないというのである。「自己から」人生を問うのではなく、「人生〔生命〕から」自己を問う、というように人生観を180度転回するということである。

そして、この観点の変更によってはじめて「意味への意志」が充たされ、またそのことによってはじめて「意味」あるいは「価値」が実現される道が開かれるということである。つまり、「この地位や名誉、そして富までも失うならば生きる意味がない」と、自己を中心にして考えるのではなく、「人生から問われている者」として自己を体験することによって、「意味への意志」の充実が可能になるのである。

このことは強制収容所における生活や、治療困難な病や死を目の前にしたときだけではない。彼はこうも述べている。

私たちが「生きる意味があるか」と問うのは、はじめから誤っているのです。つまり、私たちは、生きる意味を問うてはならないのです。人生こそが問いを出し私たちに問いを提起しているからです。私たちは問われている存在なのです。私たちは、人生がたえずそのときそのときに出す問い、「人生の問い」に答えなければならない、答えを出さなければならない存在なのです。<sup>29)</sup>

つまり、過酷な状況下で「生きる意味があるのか」と問うてもそこからは答えが出ないということフランクルはいうのである。私たちは、常に人生から「問われている存在」であり、「人生」がそのときそのとき、私たちに提起している「人

生の問い」に答えを出す存在であって、答えを出すことによって自分の人生に責任を持つことになるのである。そして、人生が出した問いに答えることによって、その瞬間の意味を実現することができ、しかも、人生が出す問いは、瞬間瞬間、その人その人によって違うものである。「今、ここ」というそのつどの状況が一時的なものであり、また、ほかならぬこの自己に課せられているという唯一性が、そのつど自己の責任とその絶対性を形成するのである。そのため、苦悩の状況の中において、自分の方から「生きる意味があるか」と人生の意味について問うても、その問いの中にある間は答えが出ないということである。

病気で「もう、生きる意味がない」と絶望のただ中にいる人も、自分の方から意味を問うのではなく、病気によってどう生きるべきかを人生から「問われている存在」として、その問いに答えること、すなわち「今、ここ」で自己に課せられた「自分の人生に責任を持って生きよ」ということである。そして、その問いは「瞬間瞬間、その人その人」によってちがうと同時に、答えの出し方も人それぞれちがうということである。

以上、フランクルの理論から言えることは、生きるとは人生から問われていることであり、生きていること自体が自分自身の人生に責任をもつことであるということである。そして、生きることは、困難になればなるほど、意味あるものになる可能性があるということができらるであろう。そして、生命の限界や、苦難のことがらにとらわれるのではなく、そのつどの目の前にある使命に向けて行為を成すことがまさに「意味への意志」を充たすということに他ならないのである。

したがって、「意味への意志」の充足とは、自己中心的な自己実現欲求をいわば忘れることによるのみ可能になるということができる。フランクルの言うように、人間には確かに「自分の人生をできる限り意味で充たしたい」という欲求があり、さらにはこの無意識的な「意味への意志」が人間にとって最も根本的な意志ではあるが、しかし、この意志が充たされるためには、自己の苦しみを忘れて、そのつどの状況（物または者）に専心することが大切なのである。フランクルが用いるところの「意味」とは、自己存在の実存的意味であると同時に世界における意味（客観的意味、あるいは超意味）でもあり、またそれは人間に本来備わっている人間存在の規範を示すものでもあ

るといえる。

注1) ここでいう「生命」は「人生」という意味である。ドイツ語の *Leben* は英語の *life* と同じくきわめて多義的な言葉である。それは通常、人生・生命・生活という意味であるが、W.Dilthey などのいわゆる「生の哲学」では、「世界」という意味を含めて用いられている。フランクルがこの語を用いる場合にも、これらすべての意味を含ませているように思われる。すなわち、*Leben* とは、時間的次元では人生を、空間的次元では世界を意味すると共に、それら両次元を含んだ生（生命）そのものをも意味している。したがってフランクルの言う *Leben* とは、自己を超えたものでありながら、しかも、自己を内から支えている生（生命）であると考ええる。

#### 引用文献

- 1) 草島悦子, 河正子, 森田達也: 緩和ケアとスピリチュアルケア 緩和ケア. 19 (1), 43-48, 2009.
- 2) Chochinov, H.M., Cann, B.J.: Interventions to enhance the spiritual aspects of dying. *J Palliat Med*, 8, 103-115, 2005.
- 3) Murray, S.A., Kendall M., Boyd K. et al: Exploring the spiritual need of people dying of lung cancer or heart failure - a prospective qualitative interview study of patients and carers. *Palliat Med*, 18, 39-45, 2004.
- 4) O'Connor, A.P., Wicker, C.A., Germino, B.B.: Understanding the cancer patient's search for meaning. *Cancer Nursing*, 13 (3), 167-175, 1990.
- 5) 水野道代, 佐藤禮子: がん患者の終末期における経験とその意味の研究. *日本がん看護学会誌*, 16 (2), 27-35, 1996.
- 6) 比嘉勇人: Spirituality 評価尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. *日本看護科学学会誌*, 22 (3), 29-38, 2002.
- 7) 平典子: がん看護における患者・家族が見いだす「意味」概念の検討. *北海道医療大学看護福祉学部紀要*, 4, 67-73, 1997.
- 8) Breitbart, W.: Spirituality and meaning in supportive care: spirituality- and meaning-centered group psychotherapy interventions in advanced cancer. *Support Care Cancer*, 10, 272-280, 2002.
- 9) Frankl, V.E.: *The Will to Meaning - Foundations and Applications of Logotherapy*. New American Library, New York, ix, 1969.



- 10) 勝田茅生著： ロゴセラピーの会話法－理想的なロゴセラピスト－. システムパブリカ, 24, 2010.
- 11) J. Travelbee 著／長谷川浩・藤枝知子訳： 人間対人間の看護. 医学書院, 1, 1974.
- 12) 前掲書 11), 13.
- 13) V.E.Frankl 著／宮本忠雄訳： 時代精神の病理学. みすず書房, 15, 1961.
- 14) 前掲書 13), 98.
- 15) V.E.Frankl 著 / 山田邦男監訳： 意味への意志. 春秋社, 17, 2002.
- 16) ibid., 9), 37.
- 17) Frankl,V.E :“Psychotherapy and Existentialism”. Washington Square Press, 40-41, New York, 1967.
- 18) 前掲書 13), 89.
- 19) V.E.Frank 著／山田邦男・松田美佳訳： 宿命を越えて, 自己を越えて. 春秋社, 147 - 148, 1997.
- 20) 安藤忠雄：「朝日新聞」朝刊（2003年2月8日）
- 21) ibid.9), 34.
- 22) 前掲書 13), 86.
- 23) 前掲書 13), 71.
- 24) Frankl,V.E: The Unheard Cry for Meaning: Psychotherapy and Humanism. Simon and Schuster., New York, 1978.
- 25) ibid, 32.
- 26) 前掲書 13), 72.
- 27) V.E.Frankl 著 / 霜山徳爾訳： 夜と霧. みすず書房, 182-183, 1961.
- 28) 前掲書 15), 221.
- 29) V. E. Frankl 著 / 山田邦男・松田美佳訳： それでも人生にイエスと言う. 春秋社, 27, 1993.

## **An Investigation into the Meaning of Suffering during Illness in the Theories of V.E. Frankl – The Will to Meaning –**

Tomoe MAKINO

### **Abstract**

V.E. Frankl believes that even tragic aspects of life, such as unavoidable suffering, can be turned into a human achievement by the attitude a man adopts towards his predicament. He established Logotherapy based on this theory, which shows how a patient can transform despair into triumph. His therapy is effective in finding 'Meaning', even with patients who have incurable or terminal-stage disease. However, there has been no report that has analysed what 'Will to Meaning' is. This study aims to investigate what it means to have attitude in 'Will to Meaning'. This paper argued the differences among 'Will to Meaning', 'Will to Pleasure', 'Will to Power' and relationships between health/long life orientation and 'Will to Meaning'. We also discussed that 'Will to Meaning' cannot be obtained by simply searching for the meaning. In other words, instead of making the end-stage patients to find 'Meaning', patients needs to associate with significant things other than themselves 'here and now'. As a result, this is considered to be nursing care towards 'Meaning'.

Key words V.E. Frankl, incurable illnesses, suffering ,Will to Meaning.